

[40]

氏名	黄英哲
博士の専攻分野の名称	博士（文化交渉学）
学位記番号	博第 496 号
学位授与の日付	平成 29 年 3 月 21 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文題目	漂泊與越境：兩岸文化人的移動
論文審査委員	主査教授 内田 慶市 副査教授 陶 徳民 副査教授 奥村 佳代子

論文内容の要旨

本論文は、台湾と中国の二つの地域に跨がる文化人の「移動」「漂泊」「越境」という現象を通して、その中でのアイデンティティの発見ということに焦点を当て、その認識の多元性を近代台湾における重層的な歴史発展の中で明らかにしようとするもので、正に、文化交渉学という学問領域に相応しい意欲的な論考であり、以下のような構成となっている。

序章

故郷與他郷

第一章 張深切的政治與文學：自傳作品所呈現的人生軌跡

第二章 楊基振及其時代：從日記看一位臺灣知識分子從戰前到戰後的心理轉變

文本越境・意義再製

第三章 《藤野先生》到臺灣：戰後初期「中日友好」的符碼

第四章 跨界者的跨界與虛構 “陶晶孫小説《淡水河心中》顯現的戰後臺灣社會像

國家重建與文化葛藤

第五章 國民性改造的構想：許壽裳與臺灣，1946-1948

第六章 歴史斷裂中的延續：許壽裳與戰後臺灣研究的展開

不在場の後殖民狀況

第七章 香港文學或是台灣文學：論施叔青「香港三部曲」

このように本論文は大きく 4 つの部分に分かれている。

まず「故郷と異郷」の部では、文化人張深切と楊基振の人生の軌跡を、戦前戦後にわたる彼らの自伝作品や日記など個人的性質を持つ資料を通して、個人の目に映し出された時代の変化について分析している。植民地出身の張深切は、1920 年代に反植民的社会運動に参加、その後まもなく台湾文化アイデンティティ再建のための文芸活動に加わった。当局の圧力から逃れるため中国に逃亡するが、複雑な戦争期の文化政治に巻き込まれてしまう。戦後台湾に戻ってからも、二二

八事件関与を疑われることになる。晩年は再び文芸創作に身を投じ、戦後初期の台湾語映画の創作者となっている。こうした、台湾及び中国南北への移動や、政治活動か文化活動かの選択は、つまるところ政治上の活動と深く関係したものであると論じている。また、楊基振の日記からは、日本で高等教育を受け満州と華北発展のための道へと進んだ一人の台湾青年が、人生の節目に遭遇した出来事についての観察や自省を読み取ることができるとした。伝記や日記といった私的文書は、単に張深切や楊基振の個人的な生活経験を分析する資料として有用であるだけでなく、内在する自我の主体性を追求する近代人を取り巻く歴史を記したものと見ることが可能であり、歴史がいかに関わりの人生に影響したかを知ることができ、また彼らもいかに己の生活が歴史と呼応しているかを伝記や日記などの文章によって明らかになると結論づけている

「テキストの越境・意義の再製」では、戦後台湾に登場した2つの作品から、テキストの流通とそのテキストから生み出される意義に関して、戦後台湾に歴史と文化のもつれ合いが生じていたことを明らかにしている。一つは、魯迅の名著のひとつ「藤野先生」である。終戦初期に台湾に残留していた日本人が刊行した雑誌『新聲』に掲載された抜粋された訳文である。魯迅の作品は戦前早くから日本や台湾に紹介されていたが、1945年に戦争が終結すると、この作品は在台日本人の間で戦争責任問題と未来への新たな歴史をいかに展開すべきかという論争を引き起こした。すなわち、戦争への反省と同時に、新たな歴史を開いていくために、いかに過去の歴史と向き合うかという問題である。特に、それは次の二つの態度に凝縮されている。ひとつは真実の過去に向き合い、たとえ困窮することになっても完全な歴史を表すというものであったが、こうした魯迅のテキストの越境とその意義の再製は、中日友好を象徴する作品としての効果を生み出しただけでなく、更には台湾の「立ち位置」はどこにあるのかという問題にまで踏み込んでいったと論じたふたつ目のテキストは、かつて左翼作家連盟に参加していた陶晶孫が戦後台湾へ渡り、台湾大学医学院教授を勤めていた際に社会新聞取材して創作した小説「淡水河心中」であるが、陶晶孫こそまさに「漂泊」の人である。中国から日本に渡って再び中国に帰国、戦後に来台後数年にして白色テロの網を逃れるため日本へ逃げ、最期は日本で病死した。陶晶孫が取材した男女の心中物語は、1950年代台湾で政府メディアから大学教授にいたるまでさまざまな解釈を引き起こし、これら社会のリーダーたちはナショナリズムを説く物語としてこの題材を利用した。陶は台湾一般民衆にかかわって世論に即した筋書きを小説中に設定し、当時の戦後台湾に入り乱れていた官民、民族、ジェンダー、言語間の不均等な権力関係を巧みにその中で表現している。社会事件から新聞事件へ、さらに小説作品へとテキストは越境し、そのたびにテキストの意義は衝突し交差した。それはまさに戦後台湾の社会文化が重なり合いもつれ合ったように、相互に呼応し合うことで、小説作品に多重の意義が生み出されたと論じている。

「国家の再建と文化的葛藤」では、魯迅の精神のなかに戦後台湾の文化再構築の重要な精神を見出し広めようとした魯迅のよき友、許壽裳を取り上げ、許壽裳が戦後に来台し、台湾省編訳館を任された際に業務を支えた具体的な思想や、日本統治時代の台湾研究業績を継承し続けたことについて論じている。「脱日本化」、「再中国化」のほかに、戦後国民政府が台湾を接收後に推進した文化政策は、当時陳儀政府の教育文化政策の重責を負っていた台湾省編訳館長許壽裳の構想であり、それは主に台湾の戦後再構築であり、これはかつて魯迅が提唱した中国国民性改造の構想を取り入れたものとする。

最後の「不在状態でのポストコロナル状況」では、施叔青の『香港三部曲』について取り上げ、

ジェンダーと植民と欲望の入り混じった香港の歴史を小説に再構築している点、及び作者がそこに存在するのか存在していないのかという点から読み解き、同様に植民経験をもつ台湾と照らし合わせて論じている。植民者対被植民者間の紛争を、小説が歴史より真実味をもって描いてはいても、最後まで作者との距離は遠い。つまり植民者や被植民者にも、繁栄衰退する歴史にも、語り手にさえも、作者は不在である。万物流転し、かつての地を再訪したり過去を再び話題にしたりする時に「不在」の状態であるのは、おそらくディアスポラ経験に埋め尽くされた旧植民地の状況であり、これは植民終了後の最も典型的なポストコロニアル状況であると結論づけている。

論文審査結果の要旨

本論文は、具体的人物の人生の軌跡、翻訳や流通により越境するテキスト、生み出され多義化していく文化的意義、台湾という場に存在していたか不在だったかという事象を通して、1930年から1950年代の台湾におけるディアスポラ(離散)と漂泊、入境と越境にかかわる複雑な歴史経験についても明らかにしようとしたものである。

氏は台湾という一種の特殊性をもつ地域とアイデンティティについてたとえば、以下のよう述べている。

台湾の歴史は近代の資本主義と帝国主義の拡張のなかで交錯し、異なる民族国家が互いに接触する大小のプレートの狭間に位置しており、重層的な歴史発展のなかで、多重の境界が形成され、このために多くの道が形成された。これら歴史のなかで形成された境界は、物質的なものであり、精神的なものであり、実体的なものであり、象徴的なものである。また、政治経済の国境と文化身分のアイデンティティの境界は、互いに交錯しているものである。重層的な歴史と多重の境界は、そのなかで生活しながらも、越境する能力という社会資本と主観的願望という文化資本をもつ知識人に、その生命史において多元的な道を歩ませたのである。中国、日本、台湾の三地域を往き来した文化人、彼らは激しい分裂の時代に、求学のため、あるいは政治的要因のために異郷をさまよひ、もともと固定的な文化に流れを生じさせた。彼ら文化人の出会いが近代東アジアにディアスポラ経験を生み出した。一方で国民国家の文化政策は文化のナショナリズム化を図るため、文化上での国境や民族の境界線をつくった。しかし文化が伝播していく道筋を見れば、自力他力で移動やディアスポラを引き起こし、逆に地域を隔てる壁を打ち破る可能性を生み出した。

こうした理解の上に立って、氏は、取り上げた人物が漂泊のなかで人生を歩み、国境を越える軌跡を描き、見知らぬ場所へ向かい、事業を展開したと述べ、彼らがそうした越境のなかでアイデンティティを発見し、それを堅持し、人生の軌跡の移動中に様々な他者と出会う中、自分の身分アイデンティティの多元性を形成したと結論づけただけでなく、更に、これら個別の人物の身の上に具現化されたアイデンティティ形成の多元的な道は、近代台湾の重層的な歴史発展のなかに組み込まれているとした点は正に氏の真骨頂であり、これまでのこの分野の研究では見られない知見である。また、こうした氏の研究成果は正に「文化交渉学」の切り拓く地平でもある。こうした点からも、本論文は博士論文として価値あるものと認めるものである。